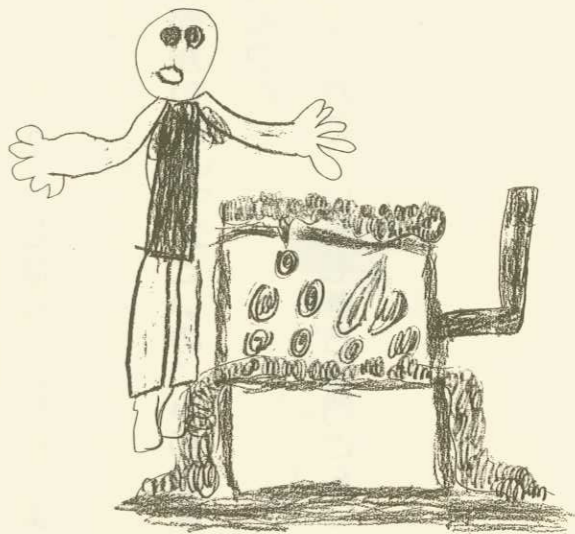


22 石臼を碾きながら

このうたは、おんちゃんらの小さかったころ、中村(なかむら) (北中町)のおばあさんらの手伝いをして、石臼で黍や豆や蕎麦を碾く時に、聞かされたうたの一部や。毎日毎日聞かされたんで、七十をすぎても、ぜんぶおぼえているんや。



このうたに合わせでコロコロゆっくり石臼をまわすと、ちようどいいあんばいの粉ができたんや。

○信心喜ぶその人は、口には唱名、手には数珠、仏や菩薩に護られて、浄土に生まれる道すがら、それゆえ行儀に気をつけて、なるべく悪事を慎めよ。

○迷いの娑婆に居る内は、欲も起れば腹も立つ、強欲、我欲の風吹かば、信心歡喜の戸を立てよ。

○迎えし嫁を憎むなぞ、嫁も他人の可愛い子ぞ、我が子も何れ縁付かば、必ず他人の嫁となる。

○兄や弟、姉妹も前後に生まれて別なれど、その根は同じ父と母。

○娑婆は即ち堪忍ぞ、成る堪忍は誰もする、成らぬ堪忍するのこそ、念仏行者の務めなり。

このうた、もつともつと続くけど、今日はこのへんにしとしようの。

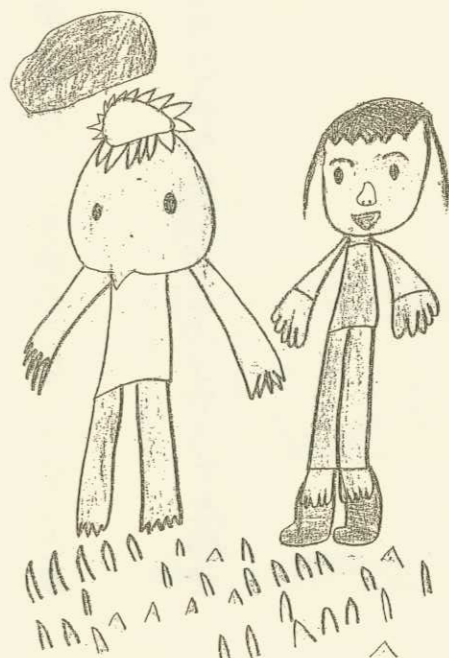
23 カッパとござんさま

カッパはの、小学生ぐらいの体でめっぼう力が強うて相撲好き。人間に化けるのもうまい。川の流れの速い深いところにすんでいるんや。福井に両方の足に米俵一表(六十キロ)ずつをはいて歩いたという横綱より力持ちの人がいた。あるときカッパと相撲をとって引き分けたが、カッパの毒にあたって苦しんだ。三日間風呂を焚かせて、ぐらぐら煮え立っている湯に入って毒を抜いたんやと。

河和田でもカッパにだまされて、一晩中夜道を行ったり戻ったり、うす明るうなあってやっと家へ帰って来た人もいた。

もう四十年程も前、尾花の山のナタ岩で、子供が谷川に飛び込んだ。「どこの子やろ」とのぞいたらカッパやったんやと。

それでは、寺中に出たカッパの話をしようかの。



こさはんの前には、昔は川が流れていて、どんどこができていた。そこにはカッパがすんでいた。カッパは川辺の畑で胡瓜を食べ、腹がふくれると、子どもに化け、村の子どもたちと河原で相撲を取って遊んでいた。その日も、村の子が河原へ行って遊ぼうと思ひ、おじいさんに「河原へ遊びに行ってくるぞの。」と出して出かけようとしたら、おじいさんが、「おい、ここにお供えしたござんさまがあるでー服いただいていけや。」といったので、ひとつ食べて出かけた。河原で待つ友達に近付くと、友達が「何時もと違う。何時もと違う。」といて喚きだした。そして化けの皮が剥げて、カッパの姿にもどって川へ逃げていったんじゃとこの。ござんさまのお力はほんとにたいしたもんやのう。

24 ふたあたまの白い蛇

この頃ではあまり見かけないが、昔は草むららを棒でつつきながら蛇取りが来たものだ。ある日寺中に来た蛇取りは、頭が二つある白い蛇をみつけた。「いりや珍しい。見せ物にできるぞ。」と、喜んで桶に入れて持って帰ろうとしたが、桶は急に重くなって持ちあがらない。このとき蛇は、いつも住んでいる家の人の夢枕に立って、「私は今、連れていかれようとしています。早く助けてください。」とたのんだ。

家の人驚いて起きてみると正夢だったので、すぐに蛇を放してもらった。

